

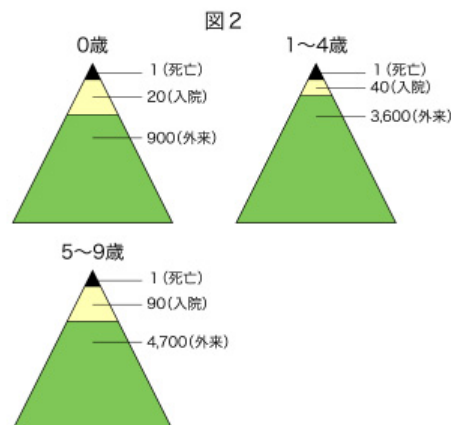
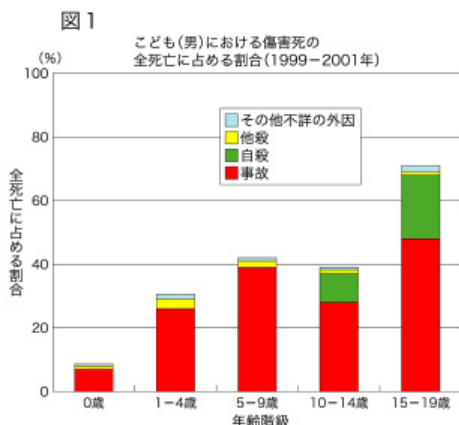
Ⅲ 子どもの事故予防教室

★はじめに

あなたは「子どもの生命を脅かす最大の敵」が病気ではなく事故であることをご存知ですか？事故は、0歳を除くこどもの死亡原因の第1位となっています。これまで、偶発的で予防が困難と考えられがちでしたが、そうではありません。子どもが置かれた環境を事故予防の視点から子どもの目線で見直して改善することで、子どもの生命を脅かすような重大な怪我は予防できることが、科学的に明らかにされてきています。

★日本での子どもの事故外傷の現状

- 事故により、平成16年には、1490人の子ども(0歳～19歳)が事故で亡くなっています。(女の子より事故にあいやすい男の子の状況を図1に示します。男の子では、1歳から19歳では、全死亡の約25～50%を事故が占めています。)
- 死亡例は、事故全体を氷山に見立てればその頂点にあり、その陰には膨大な数の事故が毎年起こっています。0歳では、死亡1人に対し、入院した子どもが20人、外来900人、1～4歳では、死亡1人に対し、入院40人、外来3600人、5～9歳では、死亡1人に対し、入院90人、外来4700人の事故外傷が発生しています。(図2)



(文献4から引用)

- 発生しやすい事故は、表1のように子どもの年齢により異なります。

表1 それぞれの年齢で死亡率の高い子どもの事故外傷の種類(平成16年人口動態統計)

	0歳(全事故中割合)	1～4歳(全事故中割合)	5～9歳(全事故中割合)
1位	窒息(71%)	交通事故(39%)	交通事故(53%)
2位	溺死(11%)	溺死(21%)	溺死(23%)
3位	交通事故(8%)	窒息(18%)	火事(11%)
4位	転倒・転落(5%)	火事(11%)	窒息(6%)
5位	熱中症(2%)	転倒・転落(8%)	転倒・転落(2%)

0歳では、窒息が1位、1歳～9歳では、交通事故が1位となっています。

- 軽傷例も含めた乳幼児に起こりやすい事故は、表2の通りです。(表1の死亡率の順位とは全く異なることがわかります。)

表2 兵庫県3歳児健診で実施された大規模(約6500人)聞き取り調査

事故の種類	経験人数 (回答者1000人あたりの件数)
落ちた	1408件
転んだ	815件
やけど	791件
誤飲	629件
ぶつかった	408件
はさまれた	371件
溺れた	141件
交通事故	102件
窒息	21件
その他	222件
合計	4984件

(文献5から引用)

この調査では、子ども一人が、平均約5回事故で怪我をしていたことがわかります。

★青森県における子どもの事故外傷の現状

- 平成16年度に青森県内で救急搬送された子ども(3401人)のうち、外傷によるもの(1556例 46%)が、病気によるもの(1502例 42%)を少し上回っています。しかも、外傷による救急で運ばれた子ども重傷例は、交通事故で6.0%、その他の外傷で4.5%と、病気での搬送例(2.5%)より、重傷ケースの割合が高くなっています。

★この章のねらいと内容

- 事故は、単なる不運の結果ではなく、環境の改善等により、予防可能です。
- 子どもの事故を予防するためには、子どもへの安全教育・しつけだけでなく、子どもを取り巻く環境を改善することが必要です。家庭内事故については、家庭内の生活環境の改善により、効果的に予防することが可能です。交通事故については、家庭だけでなく、地域や社会ぐるみの安全環境の改善が必要となってきます。
- 子どもはわんぱくなもの、でも、子どもの生命が奪われたり、取り返しのつかない重傷な怪我を負う事故に遭わずにすむ環境を整えることが大人に求められています。
- 子どもの事故死亡率が世界で最も低いスウェーデンのレベルにまで減らせれば、毎年約500人の子どもの生命を救うことができます。(0歳～9歳、1999～2001年の実績から)
- この章では、様々な事故の中でも、就学前の乳幼児が、亡くなったり、取り返しのつかない重症の怪我となりやすい事故(窒息、交通事故、転落、溺れ、やけど、熱中症など)からピックアップし、その実情と予防法について解説します。

★重症になりやすい各種の家庭内事故の実情と予防方法について

誤飲 (食物でない異物や液を飲み込んでしまうこと)

★起こりやすい年齢:5ヶ月～

乳児は、5ヶ月を過ぎると手にしたものは、何でも口に持ってくるのが正常な発達過程です。
危険な誤飲の原因1位はたばこ！特に、吸い殻を水に浸し、ニコチンが溶け出した液は危険で、重度ニコチン中毒を起こし生命に関わる場合があります。

予防策

乳幼児の口に入ってしまうもの(直径38mm以内のものはすべて)は、乳幼児の手の届く範囲からなくしましょう。

子どもの口に入るものは、高さ1メートル以下のところに置かない。

飲みかけのジュースやお酒の缶を灰皿代わりにしない。

乳幼児のいる家庭では、テーブルクロスを使わない。(引っ張って落ちた物を誤飲や誤嚥、あるいはやけど)

様々な誤飲により中毒が心配な場合には、119番または中毒110番(P29に連絡先を書いています)へ連絡してください。

誤嚥ごえん (気道異物等) による窒息

★起こりやすい年齢: 5ヶ月～

様々なものが気道(口～のど～気管～肺)異物の原因となります。食べ物の中で飛び抜けて多いのはピーナッツです。ピーナッツによる窒息や肺炎を起こして命にかかります。節分の翌日は乳幼児の気管支内異物が多発する日だそうです。

予防策

3歳まで、ピーナッツなどの乾いた豆類は食べさせない。

あおむけに寝た姿勢や、歩きながら、遊びながら、食べ物を食べさせない。

車や電車、飛行機での移動中は特に注意が必要。

乳幼児の食事中に肩をたたいたり、大声で呼んだり、びっくりさせない。

乳幼児の食事中は、大人がそばにいて見守ることが必要。



(たばこの誤飲)



(窒息の原因となりうる食べ物)

その他の窒息

★起こりやすい年齢: 5ヶ月～

片付け忘れたビニール袋をかぶって遊んでいて窒息死することがあります。

首にひもや輪をかけて遊んでいる最中に、ひもが首に絡まって窒息死している子どもがいます。(自宅でも公園の遊具で遊んでいるときも)

長く伸びた電気のコードでも、体に巻きつけて遊んでいるうちにのどを締め付けて窒息する事故が起っています。

予防策

子どもの手の届く範囲にビニール袋を置かない。

首等にひも状の物をかけて、遊ばせない。

★起りやすい年齢:0歳～2歳では、お風呂での溺死が多発しています。5歳以上では、戸外での溺れが多くなっています。

乳幼児は、鼻と口を覆う水があれば溺れる可能性があります。
例:洗濯機の水槽、ビニールプール、洗面器やバケツの水での溺れ

予防策

乳幼児のいる家庭では、少なくとも子どもが2歳の誕生日を迎えるまでは、残し湯の習慣をやめる。
浴室の入り口にはカギをかけるなど、目を離れたときに、乳幼児が一人で浴室に入れないように工夫をする。

乳幼児が持ち上げられないよう、浴槽のふたは厚くてかたいものを使用すること。

乳幼児を浴室で一人にしないこと。

入浴するときは、子どもより先に入り、子どもを先に浴室から出すこと。

洗濯機の水は、洗濯後必ず抜く。

洗濯機のふたをロックする。



(浴室での事故)



(洗濯機での事故)

やけど

★起りやすい年齢:生後6ヶ月を過ぎると急増

子どもの3人に1人はやけど体験があります。

やけどは重症になりがちな事故です。

やけどの原因となる物:茶碗、ストーブ、アイロン、魔法瓶、なべ、花火、麺類・もち、やかん、電気炊飯器、スチーム式加湿器など、あらゆる熱源が原因となります。

電気炊飯器の吹き出し蒸気は98度もあり、やけどを起こします。

スチーム式加湿器でやけどを起こすことは、あまり知られていませんが、重症のやけどが起きています。



(スチーム式加湿器によるやけど)



(炊飯器によるやけど)



(食卓のものをひっくり返してのやけど)

予防策

浴室や洗面所の蛇口から出るお湯の温度設定は、できれば50度以下にする。
家庭内の熱源は、子どもの手の届かないところ、高さ1メートル以上のところに置く。
ストーブなどの暖房器具は、柵を取り付ける。
乳幼児がいる家庭では、安全を優先してスチーム式加湿器を使用しないのも選択肢の一つです。

転倒・転落

乳幼児が転落する頻度が最も高い場所は階段です。

日本中で少なくない子どもが、窓やベランダから転落して亡くなっています。

例：お父さんがベランダで喫煙するための椅子として利用していたビールケースを踏み台として、手すりを乗り越えて転落した死亡例



予防策

できれば、階段の入り口に柵をする。
ベランダには踏み台となるものを置かない。置く場合には、手すりから60cm以上離しておく。

家庭用シュレッダーによる指つめ事故

近年多発して、社会問題化した事故です。
穴のあるところには、子どもは手を突っ込もうとします。

予防策

乳幼児が、絶対に使用できないようにする。
安全対策がなされたものもあるので、特に、乳幼児がいる家庭では、購入の際、参考にする。

★交通事故の実情と予防方法について

交通事故は、1歳以上の子どもの事故の第1位です。

子どもの歩行者交通事故

その多くは自宅近くの道路で起こっています。
子どもは一つのことに注意が向くと、周りのことは目に入りません。
危険に対する観念が乏しく、車のかげで遊んだり、急に飛び出したりします。

予防策

乳幼児は子どもの手を引いて歩くことが望ましいですが、就学前には、通学路等、良く通る道を、保護者が子どもと一緒に歩き、危険箇所をチェックしておきましょう。子どもへの安全教育は、「信号が青になったら渡りましょう」といった一般的な教育では、必ずしも効果的ではありません。具体的な現場で、何を具体的にどう気をつけたら良いのか、繰り返し話して聞かすことをお勧めします。また、子どもはおとなのまねをして成長

するもの。おとなが手本となるよう心掛けましょう。

自動車乗車中の事故

予防策

チャイルドシートを正しく装着する。

自動車乗車中、交通事故から子どもの命を守るには、チャイルドシートの着用が必要です。法律で、6歳未満の子どもには、チャイルドシートを使用することが義務づけられています。

あなたは、正しい着用の仕方を知っていますか？間違った装着の仕方をしては、子どもの生命を守ることはできません。チャイルドシートを購入するときは、自分の車への取り付けをアドバイスしてくれる店で、しっかり固定できるものを選びましょう。

購入時のチェックポイント

安全基準をクリアしているものを選ぶ。車のシートに合ったものを選ぶ。
子どもの体に合うものを選ぶ。(乳児用、幼児用、学童用)

正しい装着のポイント

エアバッグが助手席についている場合は、後部座席に取り付ける。

体重が10kg未満の子どもは、できるだけ後部座席にチャイルドシートを後ろ向きに装着する。

子どもが肩ベルトを自分で脱いでしまわないよう注意する。

自転車乗車中の事故

保護者が、乳幼児を自転車の補助席に乗せている場合、走っているときも、停車しているときも、転倒して多くの子どもが頭部などに怪我をしています。

就学前に、自分で自転車に乗り、事故にあって亡くなる子どもも少なくありません。



予防策

自転車ヘルメットをかぶらせる。

子どもを補助席に乗せる場合には、必ず子どもにヘルメットをかぶせましょう！

就学前に一人で自転車に乗ることは、子どもの未熟な認知能力からかなりの危険を伴います。

それでも自転車に乗せる場合には、必ずヘルメットをかぶらせましょう。

ヘルメットをかぶっていれば、命に関わるような重症の頭部外傷を防げることが科学的に証明されています。ヘルメットの着用は、最初はめんどくさくても、習慣にしてしまえば、「かぶるのがあたりまえ」になってしまいます。

★その他の戸外での事故

熱中症

乳幼児では自動車の中に放置されて死亡する事例が大問題。0歳児では、事故による死亡の5位に戸外での熱中症となっています。

晴れなら、冬でも車内は高温となり、2月に自動車内で亡くなった赤ちゃんもいます。

予防策

乳幼児は、自動車内で一人にしない。(短時間でも)

参考文献・引用文献

- 1) 山中龍宏. 子どもの誤飲・事故(やけど・転落など)を防ぐ本. 三省堂(1999)
 - 2) 京都市子ども保健医療相談・事故防止センター. 子どもの事故防止実践マニュアル - 社会全体(大人の力)で子どもたちを事故から守るために -
 - 3) 子育てグッズ&ライフ研究会. 子どもを守る46の生活の知恵. 合同出版(2001)
 - 4) 田中哲郎、岩坪秀樹、石井博子. 子どもの事故発生率とその年次推移 - 子どもの事故は減少しているか. 日本医事新報No. 3788:24 - 28(1995)
 - 5) 兵庫県保健環境部健康課. 乳幼児の事故防止対策マニュアル. 兵庫県(1996)
-